

# 当院 ICU における蓄積疲労の現状

Accumulated fatigue in the Shinshu University Hospital ICU

救急部・集中治療部：○市川 裕子・相河ひろみ

石川 千津・中村 圭子

医療短期大学部：揚箸 隆哉

## 〈要 旨〉

救急・集中治療に携わる看護婦は疲労が蓄積しやすいと言われている。そこで、我々は、当院 ICU の疲労実態の把握を目的とし、当 ICU 看護スタッフを対象に蓄積疲労徴候調査 (CFSI) を用いて基本パターンと4-5月期・11-12月期、の蓄積疲労の比較検討を行った。一般女性勤労者に比べ、両時期ともに CFSI すべての項目において疲労の訴え率は高かった。また、4-5月期の調査結果に比べ、11-12月期の調査では「気力の減退」、「労働意欲の低下」の平均訴え率は上昇傾向にある結果を得た。

これらより、当院 ICU 看護スタッフは他の職種と比較して心身の疲労を訴える率が高く、要因として、猪下らによる ICU の特性である精神的生産報酬が得にくく、仕事を通しての満足感・生きがい・自己実現感の得られない状態が関与している事が考えられた。

## 〈キーワード〉

蓄積疲労, ICU, 看護婦

### 1. はじめに

救急・集中治療に携わる看護者は緊迫した環境下で、適切な知識・技術の提供と、敏速な判断力・行動力が要求されるため身体的、精神的、心理的に疲労が蓄積しやすいと言われている。蓄積疲労は作業効率、記憶力の低下、集中力の欠如などを引き起こすとも言われ、看護の質の低下につながると思われる。そこで我々は当院 ICU の疲労実態の把握を目的として、新人及びローテーションスタッフが加わり、疲労に最も影響を与えると考えた4月-5月期と、新しいスタッフも仕事に慣れた11月-12月期に蓄積疲労徴候調査 (CFSI) を用いて比較検討したので報告する。

### 2. 調査方法

#### 1) 対象

信州大学医学部付属病院 ICU 看護スタッフ18名の内、調査期間内に休み-B勤 (8時~16時30分: 1時間の休憩) -K勤 (8時~21時: 1時間45分の休憩) の勤務パターンに該当した者8名とし、2期とも同一対象者で実施した。調査日は休み-B勤務-K勤務パターンのK勤務終了後の調査とした。調査期間は第1期2000年4月18日~5月18日。第2期を2000年11月26日~12月30日とした。

#### 2) 方法

蓄積的疲労徴候インデックス; CFSI (越河1992改正) 注1を用いた質問紙による留置調査。CFSIはK勤務終了後、他者と相談せずただちに○, ×で記入してもらい回収した。CFSI 応答結果

は各特性ごとの平均訴え率を算出し、一般女性勤務者の23,835名からなる基本パターンと第1期と第2期の比較を行った。

$$\text{特性別平均訴え率} = \frac{\text{当該特性における訴え総数}}{\text{各特性の項目数}} \times \text{対象人員数} \times 100\%$$

注1：CFSI, 8特性・74項目を使用した。特性の内訳はF-1「気力の減退」9項目, F2-1「一般的疲労感」10S項目, F2-1「身体不調」7項目, F-3「イライラの状態」7項目, F-4「労働意欲の低下」13項目, F5-1「不安徴候」11項目, F5-2「抑鬱感」8項目, F-6「慢性疲労徴候」6項目

### 3. 結果

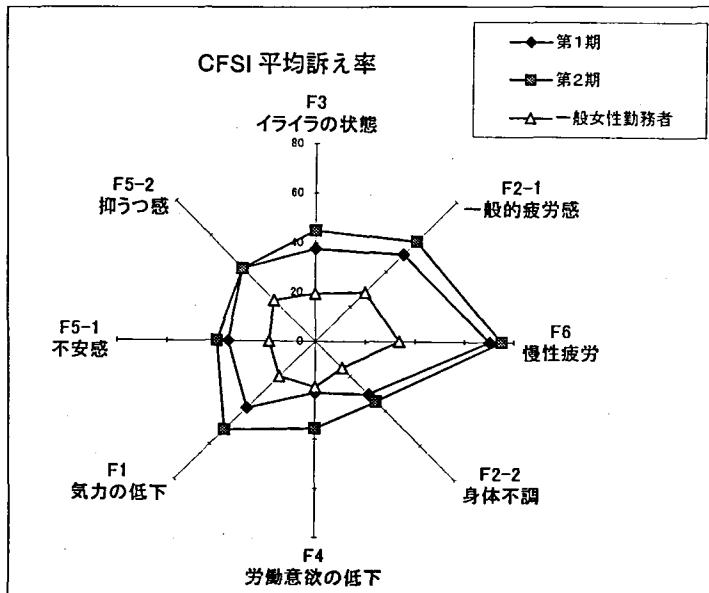
各月共通して全ての項目は基本パターンより平均訴え率が高い。またF-6「慢性疲労徴候」は両時期ともに最も平均訴え率が高い。

第1期調査と第2期調査の8特性の比較で有意差はなかった。第1期調査に比べて第2期調査ではF1「気力の減退」、F4「労働意欲の低下」の平均訴え率は上昇が見られる。F5-2「抑うつ感」は同じであった。(図1, 表1)

表1 各時期の平均訴え率

| 平均訴え率   | 社会的側面   |         | 身体的側面 |      |        | 精神的側面 |      |      |
|---------|---------|---------|-------|------|--------|-------|------|------|
|         | イライラの状態 | 労働意欲の低下 | 慢性疲労  | 身体不調 | 一般的疲労感 | 気力の低下 | 不安感  | 抑うつ感 |
|         | F3      | F4      | F6    | F2-2 | F2-1   | F1    | F5-1 | F5-2 |
| 第1期     | 37.5    | 21.1    | 70.3  | 30.4 | 50     | 38.9  | 35.2 | 41.7 |
| 第2期     | 44.9    | 35.6    | 75    | 34.7 | 57.5   | 51.4  | 39.8 | 41.7 |
| 一般女性勤務者 | 19.4    | 18.7    | 33.6  | 15.4 | 28.3   | 20.3  | 18.8 | 23.4 |

図-1



#### 4. 考察

第1期、第2期ともにすべての項目において基本パターンより平均訴え率が高かった。これは、「他の職種と比較して、看護者は心身の疲労を訴える率をもっとも高い職種である。」<sup>1)</sup> という猪下の報告と同様の結果であった。

第1期調査と、第2期調査の比較ではF1「気力の減退」、F2「労働意欲の低下」で平均訴え率は上昇傾向が見られた。これは、医療事故に対する危機管理が問われる状況の中で、当院ICUにおいても、医療事故に対する危機感と責任感が高まり、精神的に負荷となったことが要因の1つであると考えられる。もう一方の見方として、猪下らによると、ICUの特性として「患者や家族から感謝され受け入れられる」、「好意をもたれた体験を通して自分の仕事や行為に満足する状態である、精神的生産報酬が得にくく、仕事を通しての満足感、生きがい、自己実現感が得られない状態がある」<sup>2)</sup> と言っている。このことから「気力の低下」、「労働意欲の低下」の平均訴え率が高値化すると考えられた。

以上の結果より、当院ICUではこうした精神的、社会的側面の疲労に加え、身体的側面の疲労も高値であるため、勤務者がバーンアウトへ移行する可能性も考えられる。身体的側面の疲労軽減のために業務改善を実施する必要があると思われる。そして精神的・社会的側面の疲労改善の為に、スタッフ同志がお互いを尊重し、自分が行った看護行為の意味・効果を確認しあうなかで、労働意欲の向上を得るための動機付けを行ってゆける職場作りを行い、蓄積疲労の軽減を図って行くことが必要であると思われる。

#### 5. まとめ

疲労の実態を把握するためにCFSIを用いて検討を行い以下の結果が得られた。

- ・両時期ともにCFSIすべての項目において基本パターンに比べ疲労の訴え率は高かった。
- ・第1期の調査結果に比べ、第2期の調査では、「気力の減退」・「労働意欲の低下」の平均訴え率は上昇傾向が見られた。

#### 6. 引用文献

- 1), 2) 猪下光：「看護職のバーンアウト減少とその発生要因に関する文献研究」, 看護展望11(8) 49-55, 1986.

#### 参考文献

- 1) 越河六郎・藤井亀：「蓄積的疲労徴候調査について」(CFSI), 労働科学 63:229-2, 46, 1987.
- 2) 越河六郎：「CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)の妥当性と信頼性」, 労働科学 67:145-157, 1991.
- 3) 三浦豊彦他：現代労働衛生ハンドブック, 労働科学研究所出版部242-246, 1994.
- 4) 越河六郎・藤井亀・平田敦子：労働負担の主観的評価法に関する研究(1)-CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)改訂の概要, 労働科学, 68:489-502, 1992.